

終章

2011年の夏、スティーブ・ジョブズは、まだまだがんと闘え
ると考えていた。その彼から、8月末にはアップルCEOを辞任す
るつもりなのだが、その話も本書に含めないかと提案があった。最
後の部分以外は原稿を出版社に送ったあとのことだ。最後の修正原
稿を提出する直前、本書に収録したたくさんの逸話についてジョブ
ズと話し合う時間を持つことにした。ジョブズにとって気に入らな
いのではないかと思われるものも含めて、だ。

ありのままを書いてくれと要望されていたこともあり、彼の厳し
い側面もたくさん取りあげている。それは複雑で情熱的な人間の一
面である、そういう性格だったから普通の規則になど従わなくてい
いと信じ、世界を変えることができたのだと伝わるように、できる
限りの努力をした——そう、私は彼に請けあった。

ジョブズは満足してくれた。自分が礼儀正しく上品な人として歴
史に記録されないことは本人もよくわかっていたし、いかにも公式
という感じの礼讃本にならないほうがいいとも言ってくれた。まあ、
1年後くらいには読むよとも言われた。さすがの自信というか彼特
有の現実歪曲フィールドに、私も思わず元気づけられた。本当にも
う1年生きて、本書を読んでもくれるのではないかと思ってしまった
ほどだ。健康を取りもどし、アップルでまた活動するのではないか
とさえ感じ、出版を遅らせて様子を見るべきかとたずねてみた。

「いや、そうしないほうがいい。僕がまたなにかすごいことをしたら、続編を書いてくれればいい」

ジョブズはにこやかにそう言ったあと、ちょっと考えこむと、こう続けた。

「少なくとも、とっても長い終章、かな」

残念ながら、この終章はとても短いものとなった。

2011年10月3日の月曜日、スティーブ・ジョブズは、そのときが来たと悟った。がんと闘い、「次のスイレンの葉までたどり着くん」だと語るのをやめ——注目する点を変えるときいつもしてきたように突然——目前に迫った死について考えはじめた。

どういう葬式をしてほしいのか、ジョブズはそれまで語ったことがなく、妻のローリーンは、茶毘（だび）に付してほしいのだろうと思っていた。何年も前から、折々、どこに散骨したらいいのかという話をしてきたからだ。だがその月曜日、彼は、火葬はやめてくれ、両親のそばに埋めてくれと言いだした。

翌火曜日の朝、アップルでは、iPhone 4Sの発表が行われた。ジョブズが最後の取締役会でいじり倒そうとした音声認識ソフトウェアのSiriが搭載された製品だ。アップルキャンパスの講堂、タウンホールで行われた発表会には、厳粛な雰囲気はただよっていた——スティーブに近い幹部たちは彼の容体がよくないこ

とを知っていたからだ。発表会が終わると、ジョニー・アイブ、エディ・キュー、ティム・クックらにすぐ来るようにと電話がかかってきた。彼らは、午後、ジョブズの自宅を訪れ、順番に別れを惜しんだ。

ジョブズは、妹のモナ・シンプソンにも「急いでパロアルトまで来てくれ」と電話をかけた。モナは、そのときのことを追悼文で次のように語っている。

「彼の声には心からの深い愛情が感じられましたが、同時に、もう車に荷物をくくりつけてしまった人のような響きがありました。我々を置いていくのは申し訳ない、本当に残念だと思いながら、もう旅を始めてしまった人のような響きがあったのです」

そのまま電話で別れの言葉を言おうとするジョブズを、いまタクシーで空港に向かっている、すぐ着くからとモナがさえぎると、「いま言っておくべきなんだ。君が来るまで持ちそうにないんだよ」と返ってきたという。

娘のリサはニューヨークから飛んできた。ふたりの関係は必ずしもよかったとは言えないが、リサはいい娘であろうといつもがんばっていたし、実際、そうだったと言える。もう一人の妹であるパティも駆けつけた。

こうして、スティーブ・ジョブズは、深く愛する家族に囲まれて最後の日を過ごすことになった。本人もよく語っていたように、ジョブズは家庭的とは言いがたい男だったかもしれない。だが、本当

のところは、最終的な結果も含めて判断すべきだろう。会社のトップとしての彼は、要求が厳しく気難しいリーダーだったかもしれないが、熱狂的と言えるほど忠誠心の強いチームを作ったし、社員に心から愛されてもいた。同じように、家庭においては、無愛想で家族をあまり顧みない人間だったかもしれないが、しっかりした子どもを4人ももうけ、彼らの愛に包まれて最期を迎えることができた。その火曜日の昼下がり、ジョブズは、子どもたちの目ばかりを見つめていた。そしてあるとき、パティに目をとめ、子どもたちをじっと見つめ、そしてローリーンに視線を移したあと、どこか遠くを見る目になった。

「うわあ」

つぶやきが漏れる。

「うわあ、うわあ」

最後の言葉だった。意識がなくなる。午後2時ごろのことだ。息づかいが苦しそうになる。モナ・シンプソンは追悼文にこう書いている。

「そうなってもまだ、彼は厳しい表情の男前でした。独裁者の顔、ロマンチックな男の顔をしていたのです。息づかいから、彼が大変な旅をしていること、急な坂道を高みへと登っていることがわかりました」

その日、モナとローリーンは一晩中、ジョブズに付き添っていた。
翌2011年10月5日の水曜日、スティーブ・ジョブズはこの世を去

った——家族に見送られて。

ジョブズ死去のニュースに、世界が悲しみに沈んだ。その死を悼むため、急ごしらえの祭壇があちこちの街や村に作られた。「ウォール街を占拠せよ」運動の中心地であり、ビジネスで巨万の富を得ている人々の悪行を訴えて抗議が行われているズコッティ公園にも、である。世界が悲しみに沈むのは、普通、ロックスターや王女などが死んだときだ。アントレプレナーに対してもそういうことが起きたのは、ある意味、新鮮なことである。彼もビジネスで巨万の富を得た人物かもしれないが、人々の暮らしを魔法のようにすばらしいものにしてくれる美しい製品を作ることによってそうなったのだから、当然かもしれない。

ジョブズが亡くなった翌日、ローリーンとモナは連れだって彼が選んだ墓地を見にいった。ゴルフカートで案内してもらったが、ジョブズの両親、ポールとクララの墓のそばはもう満杯だったし、空いていたのは真っ平らな地面に墓標がところ狭しと並んでいるところだけだった。だが、ローリーンは、夫と同じように発想が自由で押しが強かった。まだあんず園が残っているひなびた雰囲気のある丘を指ししめし、あそこはどうなのかたずねる。あんず園は、子どものころから夫のお気に入りだったからだ。あそこはだめだ、埋葬に使う計画もないしそれは許可されてもいない——そう返ってきた。だ

が、そのくらいであきらめるローリーンではない。しつこく食い下がり、夫が永眠する場所としてあんず園に近いところを確保した。さすがだとスティーブも思うであろうがんばりだった。

そして、ローリーンは、いつもしてきたように、純粋なものを求める夫の好みとみずからの愛情あふれる気品をひとつにまとめあげた。棺は、蝶番（ちょうつがい）まで釘やねじを使わずに作られたすばらしいものを作ってもらった。シンプルで清らかなものだ。埋葬は生前親しかった人々が集まって行ったが、そのとき棺が置かれたのは、ジョブズが毎日のように午後を過ごした静かなデザインスタジオから持ってきたグレーの長机だ。この机をアップル本社から埋葬場所へ運ぶ手配をしたのは、ジョニー・アイブである。家族や親しい友人が 50 人ほど参列し、何人かが故人の思い出を語った。たとえばディズニーCEOのボブ・アイガーは、ディズニーによるピクサー買収の契約を結ぶわずか 30 分前、ジョブズとふたりでピクサーキャンパス内を散歩したときのことを語った。ジョブズからは、がんが再発した、再発はローリーンと医師しか知らない、この話を知ったら契約を取りやめたくなるかもしれないのでアイガーには教えなければならぬと思ったと打ち明けられたという。「そこまでしてくれるとは、と驚きました」とアイガーは結んだ。

10月16日の夜には、追悼式がスタンフォード大学記念教会で行

われた。ろうそくの光に満たされた教会内部は、ローリーンとジョニー・アイブによって完璧に仕上げられていた。100人ほどの招待者には、ビル・クリントン、アル・ゴア、ビル・ゲイツ、ラリー・ペイジなどそうそうたる人々が並んでいた。スティーブ・ウォズニアクやアンディ・ハーツフェルドなど、かつてアップルチームのメンバーだった古い仲間もいる。ジョブズの子どもたちや妹のパティ・ジョブズとモナ・シンプソンなど、家族も列席していた。

「スティーブには、自分の葬儀でチェロを演奏してほしいと頼まれました」

式が始まると、ヨーヨー・マがこうあいさつをした。

「私は、それより、私の葬儀で彼に悼辞を述べてもらうほうがいと返したのですが、いつものことながら、彼が望んだ形になってしまいました」

こう結ぶと、マはバッハの組曲を演奏した。

あとふたり、友だちの演奏があった。まず、ジョブズが大好きだったボブ・ディランの曲、『エヴリィ・グレイン・オブ・サンド』をボノが歌う——「激情のこの瞬間に神の御手が見える／揺れる葉の一枚一枚に、砂の一粒一粒に」と。ジョーン・バエズは、うれいを帯びているが気持ちが明るくなる『スウィング・ロー・スイート・チャリオット』を歌った。

家族は、ひとりずつ、思い出を語ったり詩を朗読したりした。

「夫の心が現実に囚われることはありませんでした。夫は、可能性

を並外れて感じとれる人でした。いつも、完璧という視点から物事を見ていました」

——こうローリーンは語った。

モナ・シンプソンは、作家らしくすばらしい追悼文を用意していた。

「兄は激情の人でした。病と闘っているあいだも、兄の美的感覚、兄の慧眼、兄の見識は揺るぎませんでした。67人も看護師を替えて、気持ちに通じる人を見つけたのです」

彼女は、ジョブズが仕事に注いだ愛情にも触れた。

「死ぬ前年にも、新しいプロジェクトに取りかかると、それをちゃんと完成させるように、アップルの友だちに約束させたのです」

私生活の面では、彼はローリーンと4人の子どもたちを深く愛していたと訴えた。長男リードの高校卒業まで生きるというジョブズの願いは成就されたが、娘たちの結婚式に立ちあうことはかなわなかった。

「私が結婚したとき、バージンロードと一緒に歩いてくれたのは兄でした。兄は、同じように娘たちとバージンロードを歩きたい——そう思っていたはずです」

だが、その章が書かれることはない。

「我々は皆——必ず最後には——道半ばで倒れるのです。物語の途中で。たくさんの物語の途中で」

アップルによる追悼式は、その3日後、アップルキャンパスで行われた。ティム・クック、アル・ゴア、ビル・キャンベルも演壇に立ったが、この日、一番印象的だったのは、楽しく、また、感動的な思い出を語ったジョニー・アイブである。スタンフォード大学での追悼式でも語ったことなのだが、アイブは、ホテルにチェックインするたび電話の脇で待つようにしていたという。あらゆることにこだわるジョブズが必ずと言っていいほど電話をかけてきて「このホテルはお粗末だ。ほかに行くぞ」と言うからだ。アイブはまた、ミーティングでアイデアを次々に出すジョブズを紹介し、たとえ、やみくもに喋っていても、きらりと光るものがあつたとジョブズの才能をたたえた。

「たしかに、しょうがないものもありました。どうにもならないアイデアなのです。でも、大胆でクレージーかつ壮大なアイデアや、シンプルで控えめだけれど、とても繊細で、細かいところにすごく深みのあるアイデアなど、スティーブも私も、思わず口がきけなくなるほどすばらしいものもありました」

クライマックスの主役は、ジョブズ自身だった。晴天のもと、まるでよみがえったかのように彼の声の中庭に響きわたったのだ。まず、1997年にアップルに返り咲いたとき、ジョブズが「シンク・デファイアレント」広告を作るに至った経緯をクックが紹介。続いて、リチャード・ドレイファスではなくジョブズ自身がナレーションを

しているものが、初めて公開された。ジョブズだとすぐにわかる声がスピーカーから流れ、集まった人々の間に広がってみんなの心を揺さぶる。

「クレージーな人たちに乾杯。はみ出し者。反逆者。厄介者。変わり者。ものごとが世間と違って見える人……」

皆、ジョブズが戻ってきたように感じた。感情のこもった真剣な声で自分のことを語っているかのように感じたのだ。

「ルールなどわずらわしいだけの人。現状など気にもしない人。彼らを引き合いに出すことはできる。否定することもできる。たたえることもけなすこともできる。できないのはおそらくただひとつ——彼らを見捨てること」

声に力がこもり、高ぶりが感じられる。まるで、ジョブズがすぐ前に座り、また、燃えるような視線でこちらを射抜いているかのように。若いころの彼そのままだ。いや、大好きなディランがそう歌っているように、彼はずっと若いままだったのだ。

「人類を前に進める人だから」——彼自身が書いた文だ。続いて、有名な最後の言葉が語られる。ジョブズの追悼式にこれほどぴったりの言葉もなければ、また、本書にこれほどぴったりの言葉もないだろう。

「彼らをおかしいと評する人もいるけれど、我々はそこに天才の姿を見る。なぜなら、世界を変えられると信じるほどおかしな人こそ、本当に世界を変える人だから」